



から独自の文化をアピールし、発展させ、独自性と自立性が経済と共に問われている時期である。

首里城の復元は目の前にせまっております、内外から増々沖縄個々の文化が関心の射になる。

県立美術館や博物館の構想も知事は打ち出しているものの、まだまだ具体的な進展は見られない。

いずれにせよ今世紀の終り、つまり一九九九年までには実現するに違いない「そう信じたい」とすれば、県内財界、企業家の皆さんの支援が必要不可欠となる。

美術館は出来たが「飾るモノがない」では困るし、あまりにも淋しく貧しい。そこで、先ほどの「企業メセナ」が登場して来る。

フランスのルーブル美術館とか、イギリスの大英博物館、ロシアのエルミタージュ

美術館は世界的に有名だ。読者の皆さんもよくご存知だろう。

それらの美術館に納められた美術品のほとんどが一九世紀のヨーロッパの王侯貴族や大富豪たちが集めたコレクションである。

つまりお金と権力のある人々が宝石や美術品を集めたという由である。すなわち、一九世紀までは王侯貴族や富豪たちが芸術家を支え、世にも希なる美しい美術品を後世に伝え残したと言う事か。

しかし二〇世紀の今日になると王制君主の立国はほとんどない由だから、その後の



パブロ・ピカソ